
ghosta city ((ゴーストシティ))

零夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ghosta city（ゴーストシティ）

【Nコード】

N6358Y

【作者名】

零夜

【あらすじ】

過去に人を殺し。

殺された一人の男が居た。

死んだ後と言うものは、普通は、あの世のはずだが。

どう言う訳か。普通に暮らせてる。

地図に存在しない町。ゴーストタウン。そこで、

少年を待ち受ける物とは、？

プロローグ

俺の名前は、新川 あらかわ 迅 じん。

突然だが俺は、人を一度殺し。

そして、地図にも存在しない町。

ゴーストシティに住むことにした。

と言う訳か。その子を殺したと思ったら、

誰が黒い服の男が立っていて。

その先は、覚えていない。

だが俺は、確実に殺された。

その子の親なのか？それとも単に人殺しがしたいだけのキチガイさ

んかは、分からない。

なぜか死んだ後もこうして暮らしているのだ。

俺は、学園に入学した。試験もいらなそうだ。

そんな怪しい所に俺は、ほいほいと入ってしまった訳です；

クラスの奴らは、面白いが時に俺が痛い子になる；

そんな痛い俺の物語です。

過去・・・(前書き)

俺は、前から気になってる子が居てさ。
告白もして。ちゃんと愛してたんだ。
けどな・・・

過去．．

滋くん！私達付き合っつて。もう。2年近くだね．．

迅「そうだな。それで？」

「キスまだだったね？」

今．．して？」

迅「え．．ああ、良いよ。」

俺は、肩を抱き寄せ。

彼女の口にキスをした．．

だが．．最悪なことが起こったんだ。

俺が口を離れたその瞬間の出来事．．

「うつ．．ああ！！苦しい．．苦しいよ．．迅．．くん。」

彼女は、冷たい地面に倒れこむ。

迅「はっ？おい！！なんだよ！！どうしたんだよ！！！」

黒い男「お前は．．危険だな。さよなら」

迅「お前っ！！誰．．う、がはあ！！！」

とくとくと血が流れるのが見える。

そして、俺の目の前は、真っ赤にそまる。

ピピピピピピ！！

迅「なんだよ；また夢か。そして、俺の静かな目覚めを邪魔する。

目覚まし時計と言う

恐怖だな！！今日は、入学式だったけな．．だる」

俺は、だる過ぎる思いをしながら、

学校の入学式に行く。

なぜかって？朝起きるより。教師に呼び出し食らって。

説教って、パターンの方が一番だるいに決まってるんだろ？

歩くこと、30分。

迅「ああ．．だるい。まあ、すぐ終わるならいいか。」

そこに誰かが俺にぶつかる。

迅「いてっ！！おいいてえぞ。」

「すみません．．急いでいるもので。では、」

迅「おいおい！！待てよ！！」

そいつの後を追い。俺は、入学式に間に合う。

俺の名前は、新川 迅。（あらかわ じん）

入学式に遅刻ぎりぎりできた。張本人だぜ！

まあ。校長のだるすぎる話も終わり。

その日は、その場解散だった。

そんな時、

迅「おいお前！！朝の！！」

「朝は、ごめんなさい．．では、私そろそろ行くので。」

と、またもや勝手に帰られる。

何なんだあいつ！

お前の頭の中に味噌つめてやろうか？

俺は、朝の事を色々愚痴りながら、帰る

一人で愚痴。周りから見ればただの変な人。

まあ．．俺は、そう思われても良かった。

この今いる世界の方がおかしいのだから。

そして、右に曲がったときの事、

「呪う．．」

迅「！！っ」

不意に後ろから声が飛ぶ。

迅「おいおい誰だ？人様にいきなり。不穏な言葉を投げつける奴は、

」

「呪うだけ．．」

迅「はあ？なんだよお前、頭のネジ何本抜けてんだ？」

「話す事などない．．」

と言うとそいつは、俺に向かって。

殺意をあらわすかのよう。

こっちに走ってくる。

迅「おい何だよ。いきなり。うわぁ！！」

俺は、両手で自分を守る。

もう終わりだ。

そう思ったとたん。

声がする。

「あぶないです！…下がってください！…」

この声は、？

過去・・・(後書き)

いきなりトラブルに巻き込まれる。迅、何も出来ない。そこに女が走ってきた。

幸仁。(前書き)

突如あらわれた。黒い者達。

それを止めに来た。暗い少女、こと。ミス　ネクラは、
俺をほつといて。一人で戦い始める。
逃げた先に。あの黒い服の男がいた。

幸仁。

逃げろと言われた俺こと、新川迅は、
逃げる途中、少年と出会う。

迅「ちくしょう。方向音痴という才能を持つ俺に、どうしろと!!」

「よう．．お前も逃げてたのか。」

迅「えっ？誰？」

「俺は、ゆめの夢野 ゆきひと幸仁

殺して、殺されてここに来た。

女を殺して。その後。迅雷にころされた。」

迅「お前．．女って、神川？」

幸仁「そうだね」

迅「てめえが．．あん時の犯人か．．」

幸仁「俺も命令で動いたから、」

そんなところに。

黒い奴らが現れる。

幸仁「くそっ．．逃げて!!迅。行くぞ!!リングレバイアス!!」

レバイアス「了解」

俺は、戦う二人を背に。

あの女を助けに行く。

迅「いた!!大丈夫か？」

「なぜ来たの．．？」

こない方がいい」

リンルリ「うしろだ!!」

「くっ．．ありがとうリンルリ」

俺は、この世界に居るのに、

俺だけあの力が使えないなんてことは、

あるのか？

いや、ないよな？

なら．．

迅「来い．．俺の悪霊．．」

「目覚めたようですね．．私は、リーン．．
貴方の悪霊です」

「あれは、死神と恐れられている．．リーン」

リーン「私は、死神．．何か大切な物を失い。
死んできた者にのみ使いこなせる力です」

迅「大切な物．．雪野。」

リーン「では、行きますよ？

一瞬で片付けます！！

両手を上にかざして下さい」

迅「こうか？」

リーン「そうです。では、行きます」

手を前に出すと。

黒い光が広がって行き．．

飲み込む．．

リーン「全て消えましたね．．」

「どうして．．なぜ貴方がそんな力を？まさか．．
向こうで戦っていた。」

少女、ネクラ系少女が、

目の前で喋る。

迅「たいせつなものを失い、死んだからな．．お前、名前は、？」

「私は、郷野きよの 水溜みずるよろしく．．」

その時、

幸仁が走ってくる。

幸仁「大丈夫？」

迅「無事、」

幸仁「俺達全員、同じクラスだから、よろしく．．俺は、恋愛関係
なら任せてほしい」

迅「水溜．．あいつ嘘言ってる？」

水瑠「コクン・」

静かにうなづく。

幸仁「うっ・じゃ。俺、先帰る!!」

つづく

幸仁。(後書き)

嫌な事に巻き込まれてしまった。
迅、だが。不思議な力によって。
難を逃れる。

だが、次はなんだ？

次回．．いきなりの転入生。

地図には存在しない町、ゴーストシティ．．何が消えようとも。
永遠に光を．．その町は、拒絶する。

転入生。(前書き)

俺こと。新川 迅は、あの戦いの次の日、俺は、登校していた。そこで、転入生．．．そいつの名は．．．

転入生。

迅「おいおいおいおい！！俺は、今、迷っている。迷っているぞお
おおお！！」

そうなのだ。方向音痴という最悪の才能を持つ俺は、
学校に行くのに迷っていた。

無性に叫びたい。

こう言う風に・・・

迅「学校どこだあああああつあああああ！！」

家を出るなり。近所の人に何だこいつと。冷たい視線を朝から浴び！
行き会った。犬にいきなり噛まれたり。

ネコを触ろうとしたら、「シヤアア！！」つと警戒され！！

おまけにいつも暗い街の中通学路を、歩いていたら。

上から、「カーカー」と不穏な泣き声が聞こえ。

何だ？と思い。上を見上げて。

カラスのフンと言う。なんともいえない。目覚ましをいただき！！

その上、方向音痴かよ！！ちくしょう！！」

嘆いてる俺の前に。

一人の少女が現れる。

水溜「おはよう・・・どうしたの？」

迅「聴かないでくれ・・・」

幸仁「やあ、迅、朝からどうしたんだ？」

まるで、最悪な目覚ましで。時計を投げつけて壊し。

今日は、学校だったときすぎ。

慌てて用意をすませ。

あわててきたら、まだセーフでしたって顔だぞ？」

彼は・・・俺の全てを、

ぴたりと当ててくれた。

ご親切に・・・

こんな親切いらねえ!!

水溜「大丈夫だよ．．．もてないのにナルシストさを保ってる。あの人は、

違うから．．．」と．．．郷野 水溜（ネクラ系．．．美少女、ミスネクラ）は、夢野 幸仁（自分は、もてないのに、

ナルシストさをたまちつづける。少年を指差す）

幸仁「あさからそれは、ないだろ．．．僕だって、女のメルトもくらは．．．

女のメルトもくらは．．．
いない」

少し期待をさえつつも、自分の携帯の友達の実現にきずきながら。

その少年は、言う。

幸仁「現実は、厳しいよ．．．二次元に逃げたい気分だ。」

迅「お前、今なにげすごい事言っただぞ．．．」

水溜「うんうん．．．しかもて。かなり引かれる言葉を．．．」

幸仁「先に行つてくれ。。今日は休む．．．」

と、背中を落とすナルシは、帰っていく。

でも．．．下を向きすぎて前が見えていないようだ。

水野「危ない．．．」

幸仁「なに？がはっ！」

迅「そこ．．．電柱。」

幸仁「無念だ．．．」

水野「先いこ．．．なんだか大変そうだし」

迅「だな．．．じゃあな。」

俺より最悪な少年。」

幸仁「ままでえええ」

俺は、うるさい奴をそっちにおいておき。

学校の教室に居た。

今日は、転入生がくるらしい。

男か？女か？

と言う。好奇心多せいの感情をいただく。
が．．周りの奴らの方がすごかった。
まるで．．回転寿司でレールを見ながら、
まだかな．．まだかなと、前の席まで見る。
卑しき子供のようだ。
そんな時、転入生がくる。
す．．

「どうも。転入生の迅雷 芽衣華です。（じんらい めいか）」
卑しき子供達（生徒）「おおお！！かわいいいじゃん？胸でけえ！！
俺のタイプだわ」

芽衣華「よろしくねっ！！」
卑しき子供達（生徒）「おれ、あいつの隣だつてさ。
ずるいぞ！！裏切り者！！かわれ！！お前には、ふさわしくない！！」

まる職おまけつきのおもちやをかってもらえず。
かって、かって。とダダをこねる子供のようだ．．
これが俺の正直な感想。
でもまて？迅雷？

確か幸仁が言っていた。
命令をした奴．．

迅「幸仁．．あいつか？」

幸仁「そのとおり。放課後呼び出す」

水溜「あの子なの？」

幸仁「間違えない」

どうやら、あの子で決定のようだ。

俺の中で怒りが暴走する．．
でも、まて？なぜここにいる？
あいつに未練なんかあるのか？
あの子も、殺されたって口か？
芽衣華「よろしくねっ？」

俺の目の前にそいつが居る。

迅「．．．ああ。よろしくな．．．人殺し．．．」

芽衣華「なんの事かな．．．分からないよ」

奴は、下を向きいきなり暗くなる。

絶対にあいつだと確信した。

生徒「おいおまえ！！転入生に何言ってるんだ！！あやまれ！！」

迅「外野は、黙ってる！！！！」

生徒「な、何だよ。変な奴だな？」

つづく。

転入生。(後書き)

学校に転入生．．すごい人気だ。

だが。俺は、そいつを好きにならない。

そして、受け入れない。

人殺しなのだから。

次回．．放課後。

地図には存在しない町。ゴーストシティ．．何が消えようとも。

永遠に光を拒絶する。

放課後。(前書き)

ついに、迅雷 芽衣華を発見．．
いや、正しくは、転入してきたのだが．．
とにかく。こんな所で、人殺しを発見してしまった俺は、
放課後にそいつを呼び出す作戦をたてた訳だが．．

放課後。

迅「あいつに違いない．．．」

幸仁「でも、どうやって呼び出す？」

水溜「私に．．．考えがある。」

と、水野は、言う。

だがその作戦ができるだけ手荒じゃなければ良いんだが；
俺は、聞く。

迅「なあ、水溜、それって、手荒？」

水溜「手荒ではありません、あの人が帰るところを、後ろから、捕まえ。」

使われていない教室で。じっくり話を聴くだけですから、

迅「．．．」

手荒である。じっくり話を聴くあたりがすごく手荒である。

まあ、それで話すならいいけど、

なんだかんだあって。放課後になる。

俺は、昼の残りのあんパンを食べようとしたところ。

「おお、これは、おいしいですね」

俺の後ろに居る。死神さんにあっけなく。650円を食われたのだ。

あー、なんて不幸な．．．

迅「おい、てめえ！、俺の650円返せよ！！」

死神「知らないなあ」

迅「口に物を入れながら、喋るんじゃない！！」

「おお、これが。リングジュースと言う奴か。うまいな」

飲み終わったパックを俺に渡しながら、言う。

因みに、ジュースのは、498円だ。つまりは、この悪霊に俺は、
1148円奪われたことになる。

だが、相手は、所詮悪霊．．．

財布などを持つてるはずが。

死神「金なら、返しますけど?」

もって、やがった・・・

とりあえず俺は、

その財布から、

1148円を取ろうとしたところ。

「すみません。あんまりお金なくて、」

223円を返しやがった・・・

迅「お前に、食べ物物の恨みと言う物を、教えてやる。」

「はい?」

迅「金で返せないときは、どうすると思っ?んん?」

「分かりません・・・」

迅「じゃあ、教えてやる。耳貸せよ」

「えっ?み、耳ですか?」

迅「頬を赤くりリンゴのように染めるなよ。なにで返すか?それは、

(小声)「体で返すんだぜ?」

「う、わ、わあ!!そっそんな・・・私の体ですか?」

迅「うむ。」

「え、えええ・・・」

注意、これは、幽霊と少年の物語を描いた。ハレンチものでは、けしてない!!

ない!!!だんじでない!!!!

これは、世間的なルールである。

かりをつくつたら、返す。

返す!!返す!!!当たり前前の事である!!!!!!

「わ・・・わかりました。いつですか?」

迅「そうだな・・・今日の夜中、とか?どうよ?」

「そ、そんな・・・」

迅「いや・・・真に受けなくてください!今、想像したけど。かなり。俺が虚しい事になる。

だから、今度そんなことしたら、

本当にAVいや．．ゆるさねえぞ？」

「は、はい．．」

水溜「見つけました．．現在。下駄箱前．．

幸仁「そちらの状況は、？」

幸仁「こちら、幸仁．．ああ、歩いて来てる。こっちに。右足から、歩く

足は、その本人のきき足を意味する．．」

水溜「それが．．なにか？」

幸仁「つまり。対面したとき、右からけられる事が多いって、ここです。」

水溜「了解」

幸仁「目標接近．．通信を一度、きる。グッドラック。」

水溜「はっ？グットラック？ブチ。あ、切れた。」

幸仁「やつほい！！今の俺、決まってんじゃねえ？高感度は、俺のものだ。「ピピ」んっ？」

水溜「高感度は、貴方のものではありません．．あなたの事を好きでは、ないと言う事ですね。

誤解のないように。では、」

幸仁「「ピッ」な、何！！やはり俺は、高感度を物に出来ないと言うのか！！」

僕は、俺は、私は、！！「ピッ」なんだ？」

水溜「過剰なパロは、ご遠慮ください。では、」

幸仁「チーン．．終わった。

あ、来たね．．」

迅雷「ふう．．まさか、あんな形で出くわすとはね。びっくりしたよ。

あはっ！ねえ、レクイル。」

レクイル「そうだな。」

幸仁「そこを動くな．．」

迅雷「幸仁．．何の用？」

幸仁「お前をここで、地獄会に落としに来た」

迅雷「やってみなさい？」

幸仁「遠慮しませんよ？来い！！レバイアス。」

レバイアス「どう戦う？」

幸仁「まずは、攻撃の分析からだ．．」

レバイアス「分かった」

迅雷「どこ見てるの？」

レクイル「はあ！！」

幸仁「うわあ！」

大きな大剣が。俺の肩から上を通る。

迅雷「あれ？なーんだ。あっけない。かえろかえろ」

幸仁「おいおい。勝手に試合終了か？俺まだ生きてるんだけど？」

迅雷「なっ．．あの一撃をかわすなんて、いいわきなさい？」

幸仁「うおおおおお！！」

レバイアス「食らえ．．」

俺は、リングを相手の足あたりから、

降り始める。

幸仁「捕まえた！」

レバイアス「まだだ。」

迅雷「わお．．危なっ！！もう少し。で、捕まえられてしまつと」

ろ。だつたわね」

レクイル「女を捕まえてどうするんだか．．」

迅雷「こ．．こら！！私が誤解を招くような言葉を言わないで．．

私、想像しちゃう。」

幸仁「地獄でも想像してろ！！」

レクイル「くっ！！」

迅雷「危ないっ！！」

もうそろそろ良いかな？ていあ！！」

上と下から、大剣が来る。

俺を串刺しにする気か？

幸仁「ぐっ!!」

おれを、串刺しにして動けなくして、どうする気だ？
まさか．．束縛？」

迅雷「な、何いつてるの？きよ、興味なんてないよ。」

幸仁「本当かよ．．」

迅雷「本当だよ!!」

幸仁「まあいいか．．遊ぼうぜ!!人殺し!!」

迅雷「はああ!!」

幸仁「はいはい危ない危ない。」

迅雷「つち．．

なら、こうしてやるわ!!この校舎を私の物にしてあげる。
行け!!悪霊達．．ここを物にしなさい。」

悪霊「ういーす」

これは、時間がかかりそうだな．．

迅「おい．．感じるか？」

「ええ、確かに感じます。とても嫌な感じです。」

俺は、不穏な感じがし。

水溜に電話をかける。

迅「おい水溜」

水溜「状況は、分かってる．．こっちにも悪霊が居る．．」

迅「おい!今、どこに居る?」

水溜「体育館。」

迅「待つてる!!助けに行くぜ!!」

いくぞ!!」

「了解!!」

つづく

放課後。
(後書き)

いよいよ放課後戦も!!

おおずめだ!!

次回。「放課後、決着」

地図には、存在しない町、ゴーストシティ・その町は、
何が消えようとも、永遠に光を拒絶する。

放課後戦・決着。(前書き)

転入生は、人殺しだった。
その転入生とのバトルは、
決着を迎える。

放課後戦・決着

幸仁「ち・体力が」

芽衣華「もう限界なんじゃない？あきらめて串刺しになったら？」

幸仁「あきらめるかよー!!」

芽衣華「威勢が良いね？でも現実貴方のまげよ？」

俺は、待っている。あの二人が来ることを信じて。

二階 教室廊下。

迅「ちっ・何なんだよこの悪霊の数!!ありえねえーよ!!」

こいつ!!俺の悪霊!!」

「かなり居ますね。いけますか？」

迅「やるしかねえだろ!!」

俺は、目の前にいる敵の事を考えた。

水溜がどこに居るかも考えずに。

ただ。方向音痴が突っ走る。

このままでは、自分を見失いそうだが。

迅「ちっ・こっちもか!!」

「貴方・動きが悪い。何か別のことに頭が行ってませんか？」

迅「それどころじゃねえって、ことは、分かってるけど。」

あいつの無事が気になるんだ。」

「今は、前のことだけ考えて下さい。貴方が落ちては、意味がない」

迅「落ちる？」

「そうです・地獄界に。地獄界に落ちたものは、

永遠に。魂を取り戻すことは、出来ないそうです。

いわばここは、地獄界と天界の狭間なのです。」

迅「くっ!!初めて聴いたぜそんな話。ぞつとしねえ話!!」

あぶねえ!!」

俺は、悪霊の攻撃を避けながらも会話すると言っ。

無理すぎるテクを使っている。

むしろ集中しないのは、あいつの方だと思うが；
思いながら、俺は。エレベーターに飛び乗る。

迅「ちっ！！これで、体育館まで降りるぞ！！！」

「分かりました。」

水溜「うっ．．．視界が歪む。もしかして。ここまで．．？
！！っ」

私は、体育館の壁に飛ばされ。

もう体力がない状況。

ほとんど気力で立っている。

水溜「まだ！！はあ！！！」

黒いものたちが増える。

増殖する。

もう駄目らしい．．

その時、体育館のドアが開く。

迅「みずるうううううううううう！！！」

オラアアア！！！」

迅「大丈夫か？」

水溜「迅．．君」

迅「おい、しつかりしろ！！！」

そこに襲ってくる黒い者たち。

迅「ちくしょう．．どうにかならないのかよ。

ああ！！水溜．．まだ。落ちるなよ。

まだ。みずるうううううううううううう！！！！！」

「んっこれは、？私と迅の体がシンクロする？」

迅「まだまだ．．まだ終われない、うああああああ！！！！！」
体育館が黒く光りだす。

そして、迅の動きが早くなる。

迅「おせえ！！！！！」

黒い物は、全て消える。

迅「この力、何なんだ？」

「それは、表意です。私と貴方が。表意する。仲間がピンチまたは、自分がピンチの時、

それは、発動されます。最初に目覚めたのは貴方ですね？

私は、貴方と表意契約を結ばなくてはなりません。」

迅「何が必要なんだ？」

「貴方の血痕です。」

迅「.....」

「最初は、戸惑います。ですが」

迅「分かった」

「えっ？」

迅「分かったと言った！！どこの血だ？」

「貴方の血管に流れる血を少しもらいます手を」

俺は、手を出す。

「では、行きますよ？」

釜が振り上げられ。

俺の血管目掛けて。降りてくる。

て、おい。ちよつと待て！！

迅「それじゃ、手が切り落とされちまうよ！！これ使えこれ！！」

「これは注射器？」

迅「ああ、それで俺の血を必要な分だけ抜け！！」

「了解です」

「ぞしゅー！！」

迅「うぐっ！！」

「シュー」

「この位です」

迅「よし、契約終了！！」

水溜「幸仁を助けに行こう。」

俺は、またエレベーターに乗り。

下駄箱まで降りる。

幸仁「ちっ...こいつ。半端じゃない」

芽衣華「はあ．．．はあ．．．そろそろ。こりなさいよ。」

幸仁「へへっ．．．何言つてやがる。俺は、しつこいんでね．．．はあ．．．はあ．．．これくらいじゃ死なないんだよ。悪いな．．．奥の手だ。」

表意．．．」

リバイアス「契約は、すんでるからな。いいだろ。表意！！」

幸仁（表意）「まだ。負けられないんだよ。俺は。」

芽衣華「なに？何なの？あれ。」

幸仁（表意）「あああ回復してきたぜ！！行くぞ？」

芽衣華「はあっ！！」

幸仁（表意）「．．．おせえな？うらっ！！」

俺は、リングで転入生に攻撃。

芽衣華「うああ！！」

幸仁（表意）「ほらほら．．．もっと叫べよ！！おんなあ！！」

芽衣華「さつきと違う？」

迅（表意）「おいおい一人で張り切ることは、ないですよね？」

幸仁「

幸仁（表意）「おお、お前も表意か。」

芽衣華「ふ。2対1なんてなれてるわ」

水溜「じゃあ、3は、？」

芽衣華「なんですって？」

水溜「聞かせて。詳しい話」

芽衣華「話すことなんてないよ。皆シネエエエ！！」

大剣が三人の前に横から振られる。

それを全員で避ける。

迅（表意）「動きが甘いですね？」

幸仁（表意）「オラア！！後ろだ！！さあ、覚悟しなあ！！！！」

俺は、体力が減り弱っている彼女に。

リングを上と下から通し。

二つとも閉める。

「キユっ！！」

芽衣華「うんあー！離せー！離せー！」

水溜「吸い取る．．リンルリ」

リンルリ「吸い取るのね．．おk」

芽衣華「うあー！！うっああああー！！力が出ないー！！」

「バタっ．．」

迅「さて、連れてくか」

幸仁「そうだな」

水溜「賛成．．ありがとリンルリ」

リンルリ「いいわ．．いつでももっ。」

芽衣華を使われていない教室に連れ込む。

そして、縛る形で拷問。

注意別に、変な意味ではない！！

はかせるためだ！！許してくれ！！」

芽衣華「うっ．．私をどうするの？」

幸仁「拷問する。」

芽衣華「ご、拷問．．」

水溜「さあ．．言つて。なんで命令なんて？」

芽衣華「話す必要がある？」

幸仁「リング強．．」

芽衣華「うんわああー！！」

水溜「吸い取り強化」

芽衣華「ああああああー！！

違う私は、

幸仁「リング強ー！！」

芽衣華「いやああー！！」

水溜「吸い取り強化」

芽衣華「やめてええええー！！」

迅「さつさと話せよー！！電気 強ー！！」

芽衣華「痛い痛いよー！！」

迅「さつさと話せよー！！人殺しー！！！！」

芽衣華「うつああああああ!!」

体を擦じらせながら。今にも死にそうな顔で。

痛みに耐える芽衣華をみて。

もつと苦しめて。殺したい。苦しめて苦しめて苦しめて。あいつと
同じ目にあわせたい。

そう思ってしまう。

幸仁「落ち着けよ!!」

迅「落ち着けるか。答えないなら殺す!!!!」

水野「やめて!!!!殺しても意味がない。死んだら意味がないの。

幸仁「抑えてて」

迅「てめえ!!離せ!!」

幸仁「殺しそうだから」

芽衣華「私は、その頃、やんでいてね。 .

殺さなきゃ気がすまなかったの。」

迅「人と上手く、コミュニケーションがとれねえから。殺そうって
か!!」

しかも!!女の子を!!」

芽衣華「ええ、あの女が憎かった。だから殺したのよ。あはは!!」

あははは!!」

迅「てめえ!!!」

それが!人の恋人だと知って殺したのか!!」

芽衣華「えっ。 . ?恋人?あの子。彼氏がいたの?」

迅「知ったような口きいてんじやねえ!!」

ああそうだ!!俺は、彼女が本気で好きだった。

大好きで!!絶対に離さないと思った。

でも俺は、肝心なときに助けられなかった。

最低な男だ。でもなっ!!そいつを殺すように命令して、

自分で動かずに人を使う方が!!もつと最低なんだよ!!

それがてめえなんだよ!転入生できて仲良くしてやろうと思ったら、

これだ!!俺は、これ以上人が死ぬのを見たくねえんだよ!!」

芽衣華「はっ．．私を友達と想ってくれるの？」

こんな奴でも友達として。付き合ってくれるの？」

迅「当たり前だ。でもな、人を自分の憎しみのために平気で殺すような友達は、俺は、いらねえ！！

ここには、友達が二人居る。

信頼できる奴らだ」

幸仁「迅．．」

水溜「迅君．．」

迅「俺は、友達として受け入れてやるよ。

どんな最低な奴でも。どんな馬鹿な奴でも。

本気になれば誰だって！！馬鹿じゃなくなる。

だから受け入れてやるんだ！！

ごめんねで繋がる友達、

受け入れてやるよ！！幸仁も水溜もあんたの含めてな！！」

芽衣華「ごめんなさい。」

迅「ああ。もういい、」

水溜「迅君．．」

幸仁「迅！？」

迅「言つたる？ごめんで繋がるって。だからこれから、よろしくな。

芽衣華」

芽衣華「迅．．君」

水溜「そんなに簡単に許しあえるんだ」

幸仁「それが絆さ．．でも水溜、お前は、迅の事、

友達じゃない、恋愛の面で、気になってるんじゃないのか？」

水溜「びくっ！！う．．うん。でも。無理。」

幸仁「なんで？」

水野「だって、彼女が居るじゃない．．」

幸仁「いや、違つぜ。きつと迅は、お前を好きになったら。昔の彼女よりも
大切に思ってくれると思つぜ。」

END
水野「うん。」

放課後戦・決着。(後書き)

転入生、迅雷 芽衣華は、悲しさから。人殺しに変わってしまった。
だが。それを。迅は、絆と言う。方法で受け入れたのだ。
そろそろ。クリスマス..
次回！クリスマス旅行！！

地図に存在しない町、ゴーストシティ。その町は、
何が消えようと。誰が消えようと。永遠に光を拒絶する。

クリスマス旅行！（前書き）

俺こと。新川迅は、過去に人を殺している。

そして、天界と地獄界の狭間で、

俺は、普通に学生をやっている。

今日は、学校が休みなので。久々にゲームをしていた。

クリスマス旅行！

迅「うわっ！！また見つかったぜ！」

俺は、気楽にスパイゲームを楽しんでいた
やられながら、そろそろクリスマスと言う事もあり。

ゲームを大量に買いすぎてしまい。

クリスマスイブの夜に朝までかけて。

一つゲームをクリアしようと言う馬鹿な作戦。

試しにプレイしたゲームが。

スパイゲーム「スパイリッド」である。

このゲームは、様々なゲームたちが。

予約満員の中で手に入れたものである。

そこでは、スパイリッド戦争があった。

だがそこに水溜。(あのネクラ)が居たのがいささか気になる所である。

迅「よっしゃ！」

「んっ？ぬおおお！！！」

迅「おいおい！また足吹っ飛びますよ。クレイモアかよ！！

ちくしょう！！！」

嫌になってリセットボタンをポチっ．．

はあ．．なにか楽しいことは、ないのか？

迅「俺に楽しみみくれええええええええええ！！！」

家の中で叫ぶと。

「プルルルルル！」

普段ならないはずの。電話が忙しくうるさい。

俺は、少し不機嫌に。今ゲーム中なんだよ！！負けたばっかだよ！！
ゲームオーバー何回目だよ！！的な雰囲気の声で

電話に出る

迅「もしもし？」

水溜「今日、学校」

迅「えっ？休みじゃねえの？」

水野「今日は、クリスマス旅行の打ち合わせ」

迅「俺行かなくて言いや、じゃ、そういう事で」

「ガシヤンと切る」

「プルルルルルルルルルル！！」

迅「なんだよ？」

水野「全員強制参加。」

「ガシヤン」

「プルルルルルウル」

迅「はあ？」

水野「持ち物、筆箱」

「ガシヤン」

「プルルルルルルルル」

迅「なんだつつつてんだよおおおおお！いたずらですか？

一回の電話で全部伝えやがれ！！」

水野「そうすればよかった。頭いいね

じゃあ、もう一度最初から」

迅「もういいいいよおおおおおおおおお！いたずらだよ！！」

俺は、不機嫌で着替える。

「プルルル」

迅「なんだよ！！」

「宅急便です」

迅「頼んでねえーよ！！」

「ガシヤン、」

不機嫌で登校、

不機嫌でせきつき。

すると教室がクリスマスでにぎわう。

芽衣華「迅くうーん」

そう、彼女は、芽衣華。

どうやら、幸仁も水溜もいるらしい。

芽衣華「はいこれ。」

迅「なにこれ？えっ？ロレックスの腕時計!!」

幸仁「じんくうううううん」

迅「はあ？」

幸仁「迅君だいです、ぐほあ!!」

俺は、後ろから飛んでくる。幸仁に裏券をかます。

幸仁「殴ることは、ないだろ？ほら。プレゼント。」

迅「何これ？」

幸仁「ティッシュ」

迅「顔面蹴り!!」

幸仁「くばらっ!!わかったよじゃあこれは？」

迅「何これ？」

幸仁「金のうん」

迅「うおらっ!!右ストレート!!」

幸仁「ぎゃう!!じゃ、じゃあこれ。」

迅「なんだこれ？」

幸仁「萌えキャラ写真とエロアニメ録画せつ」

迅「おらおらおらおら!!」

幸仁「がふ、ぎゃふぐおお!!ならばこれは、どうだ!!

おふくろの味、食いかけてポテチと飲みかけコーラ」

迅「踵落とし!!!!つうかよくそんなもんとつといたな!!

何日ほつといたんだよ!!コーラだって。炭酸抜けただけの砂糖みず

じゃねえかこのやるお!!」

幸仁「もつたいたいから2年ほつといた。」

迅「二年もほつといて普通にイブにあげられる貴方の心がびっくり

だよ!!!だいたい。

てめえの財布の中いくらだこのやるお!!満足に菓子もジュースも

かえねえのかよ!!!」

幸仁「迅・・・お前に上げようと思って。二年間、机の中に」

迅「いらんわ！！そんな物！！捨てる！！今すぐ捨ててこおおおおい！！！」

幸仁「だって、何でも受け入れてくれるんだろ？」

俺は、あの時言った言葉に後悔する。

しつかりと伝わっていないようだ。

迅「そう言う意味で言ってるねえーよ！！だいたい二年ほつとしたのなんか誰が受け入れるんだよ！！！」

幸仁「俺（キラン）」

迅「お前、おかしいだろ、しかも妙に輝いてるし輝くなよ。そんなことで！！！」

幸仁「ならば．．これを出すしかないな。」

迅「な、なんだと？」

幸仁「ふふふ．．まだまだ甘いのだよ。君は、

バナナの皮とみかんの皮。」

「ブチツ．．」

迅「ああ、よくもってきてくれたな。じゃあ、お疲れ様。ドロップ
キック！！！」

飛んでけ！！！」

幸仁「うわあああああああああああつあああざんねーん」

迅「やな感じみたいというなよ馬鹿」

水瑠「迅君、どうも．．ちょっと相談があるのでいいですか？」

迅「ああ、いいけど」

幸仁「まだプレゼントあるけど」

迅「飛び蹴り！！！」

幸仁「うわああああ」

水野「旅行で、一緒に組む人が居なくて」

迅「ああ、」

水野「宜しければ．．その。私と組んでくれませんか？」

キタアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アア

水野「あの．．．」

迅「なんだ？」

水野「明日20日から．．．よろしくね。」

迅「ああ、任せろ」

芽衣華「明日の夜、芽衣華寂しがりやだから、一緒に寝よ？ねえ？
いいでしょ？」

だ・め？」

上目遣い。俺の弱点！！

幸仁「ああ、良いよ」

やった．．．迅君と二人、

やった。幸仁君．．．私の攻撃に「ころだ！

ごみども（生徒）「リア獣撲滅うゝああゝ」

俺には、生徒がゾンビのように見えた。

やはり。もてない者の執念は、怖すぎる。

教室は、そのゾンビの黒い執念をよそに。

ハッピーな雰囲気が流れてるところと分かれた。

クリスマス旅行！（後書き）

クリスマス旅行のグループが決まる。

はしゃぐ。迅、そして、幸仁。

そして、もてないゴミたち・・・（どんまいです）

だが、水野からのプレゼントとは？

地図に存在しない町。ゴーストシティ。そこには、

もてない者と運の良い者。

なにかあるうとも。迅達は、もてない者の執念を拒絶する。

あれ？間違えた？ま、いつかw

クリスマス旅行 到着 (前書き)

俺こと、新川 迅は、クリスマス旅行と言う名の。

行事に強制参加させられていた。20日から、24までクリスマス旅行だ。

だが、本当に今日は、2日なのか？

クリスマス旅行 到着。

迅「うわぁ．．．集合はやっ！」

現在時刻、午前4時。

俺は、無理やり眠い目をこじ開け。

無理やり。着替えをし。

嫌々と、学校に着き。

集合早すぎだろ！と愚痴をはき捨てていた。

そこへ、

水溜「おはよう．．．迅」

ミス ネクラがやってくる。

朝の挨拶からして、暗いのである。

そして．．．

幸仁「じんくん!!!」

迅「うわ、昨日のドロップキックで火星まで飛ばしたはずの、幸仁がなぜここに？」

ドロップキック？とはてなが付く人は、

この前の会を読むことをおすすめする。

芽衣華「幸仁君．．．どうして？」

幸仁「えっ。ああ、一緒に来る約束か。悪い、」

芽衣華「まあいいよ。」

先生「やぁ．．．皆、出発の準備は、いいですか？」

俺は、あの先生に「ちよつとこつちこい」とアイコンタクトをし、こちらに呼ぶ。

そして、聞くのだ先生のポケさを。

迅「先生20日って、言ったよな？」

先生「そうだが．．．」

迅「先生、日付見てください」

先生「あ。」

迅「なんだ？」

水野「この部屋、すごい広いね。よろしくアウトっ!!」

水野「真っ赤・・・」

迅「お前もだろ・・・」

もしかしていい感じ？

幸仁「あ、芽衣華」

芽衣華「うえ／＼／？」

幸仁「ごみ。付いてたぞ。」

俺は、笑顔で言う。

芽衣華「ありがとう」

芽衣華の顔が「かあああ」っと赤くなっている。

迅「つつか。今日はもう。消灯らしいな」

水瑠「そうなんだ」

もう消灯・・・

二人で寝る・・・

はっ。私、何を考えているの？

迅「電気、消すぞ？」

俺は、電気を消し。布団に先に入る。

「パチっ」

水野も入ってくる。

迅「あっ・・・」

背中がぶつかる。

すると。

「シユル」

水瑠が向きを変えた?!早い早いまだ早いぞ!!!

幸仁「あ、そういえばもう消灯だった。電気消すよ?」

芽衣華「う、うん」

「パチっ」

芽衣華「・・・みゃあ」

幸仁「えっ?」

芽衣華「寂しがりやって、言ったでしょ?だから、猫みたいに甘える。みゃあ・・・」

幸仁「お、おお」

なんだろう・・・?初めてすぎて緊張する・・・

水溜「寒いので。抱き枕にしても・・・いい?」

迅「勝手にしろよ」

俺は、まともに彼女の暖かさが伝わる。

余計な緊張だ。

このまま、楽しくいければ良いけどな。

クリスマス旅行 到着 (後書き)

旅行場所に到着、

そして、密着する生徒、

そして、もてないで寂しく一人で眠る生徒。
悲しみである。

そんな中・・・事件が起こる。

クリスマスプレゼント（前書き）

俺は、喉が渴き。

おきだし、水を飲みに行く。

そして、部屋に帰り。

水溜と雪を見ていた。

悲劇がおこる．．

遅れてくる。生徒、

俺は、また。

クリスマスプレゼント

朝、4:00時。

まさに早朝である。

俺こと。新川 迅は、喉が渇き

おきだし。水道に行く。

迅「うんあああ！！まだ早朝すぎるじゃねえかああああ」

俺は、喉の渇きと言う。とんでもない悪魔に起こされるのだ。

そして、とぼとぼと水道を探しに出かける。

迅「水道．．水道つと。あ、これこれ！」

あれから、なんだかんだとあり。

今日は、20日だ。

迅「水道が．．．4つ？」

どうなつてんだ？これ、まあいいや。一つ目

うん。これは、普通、問題は、次からか。

おいおい、嫌だぜ？はるばるクリスマス旅行に来て。

いきなり入院だなんて、

二つ目の蛇口をひねる。

飲む。

すると、「シユワアア」

迅「んっ？炭酸飲料？しかも、コーラ？えっ？なんで？

次ぎ次」

迅「んっ？なんだこれ。水が出てこないぞ？」

蛇口をひねる。

迅「ぎゃああああああああああああ！！！！」

そこからは、大量のGが滝のように出てくる。

迅「なぜ？水道にGが？（ゴキブリと言う悪魔）」

次々！！」

迅「うおえっ！！しょっぱ！！完全に塩水かよ！！こちとら喉かわ

いてるつてのに!!

ん？5つ目？なんだこれ？なんか紫だな？グレープか？」
飲む。

迅「ヴっ!!!!こ、この味は、グレープなどと言う優しいものじゃない．．どく．．水．．だ」

「バタツ」

DEAD．．．

皆さんさようなら、主人公が死んだので。

これで終わり。

迅「させるかあああああああああああ!!!!」

そう俺は、一日の半分を、

部屋の布団の上で過したのだ。

水溜「だいじよう．．ぶ？」

迅「あ、ああ。問題ない。俺は、風呂入る」

水溜「うん」

迅「ふう．．何でだ？ここの蛇口おかしいだろ。

完全に。まあ．．ありなのか？」

そう思いながら、浸かっていると。

迅「まずい．．ゆで迅になる．．出よう。うん。」

夕食も食えず。

俺は、そのまま。部屋にもどる。

水溜「おかえり。どうする？私？」

迅「雪、降ってるし。ベランダ出ようぜ？」

ほらよっ」

俺は、戸惑いを隠せない。水溜に手を貸す。

幸仁「ふう．．さむ。雪かよ」

俺は、俺で、寒さに凍えていた。芽衣華は、もう氷だ。

芽衣華「さむい．．」

幸仁「でしょうね．．だって、半分。芽衣華凍結してるもんな」

芽衣華「あたたためて？」

幸仁「えっ?!」

芽衣華「ねえ．．だめ？」

指を口にあて、俺を誘うようなそのしぐさは、なんだ！
けしからんけしからんぞおおおおおおお!!

幸仁「だめって．．事は、」

その時、部屋のドアが思いつきり開けられる。

生徒「大変だ!!」

俺は、その一言で嫌な予感がした。

おそろおそろ聞く．．

幸仁「何があつた？」

生徒「一階で．．み、皆が!!血を流して倒れてる!!!あの傷が
らみて、殺されてる。

いま。この旅館には、黒い物とそれを動かしてる。黒い服に身をつ
つんだ奴が居るんだ!!

三階の連中にも!!」

幸仁「早く!!緊急放送しろ!!!あいつらが死ぬ!!!」

生徒「了解!!!」

迅「いやあ．．良いタイミングの雪だな。ん？水溜？」

水溜「話したい事がある。」

迅「なんだ？」

水野「私．．私。」

迅「なんだよ？」

その瞬間水野が俺に向かって、走ってくる。

そして、飛びつかれる。

迅「お、おい!!」

水野「私!!もう隠せない!!」

迅「なんだ？」

水野「迅．．貴方が．．好き。」

迅「えっ．．」

水野「ごめんなさいいきなり。」

迅「先に言われちまったな．．」

水野「えっ．．？」

迅「俺から、言おうと思ったのにな。ははっ、駄目だな」

水瑠「ありがとう．．雪、」

迅「綺麗だよな．．」

水野「クリスマスプレゼント．．だね」

迅「上手い事言うな」

その瞬間だ．．

一瞬だ。

目の前で告白した水野が．．

「グサっ！」

水野「．．．！！！」

「あーごめん。邪魔だから、刺しちゃった。」

水野の腹に、鋭い刃が刺さっている。

「バタッ」

水野が倒れる。

迅「おい！！大丈夫か？おい！！」

「あ．．死んだか。悪いね。じゃあ、」

迅「てんめえ．．．いきなり何しやがる！！！！」

「だって．．ここ。今日、俺達を取りに来た。」

迅「てんめえ！！！」

「てめえじゃない．．俺は、しろかわ 白河 みづる 美鶴」

迅「目的はなんだよ！！！」

「12月24日．．イブの夜に、ここにとまってる。奴らを全員殺す！！」

それが目的だ．．

にしても久しぶりだな？新川 迅．．

迅「なんで知ってる？」

「気づかないようなら教えてやる．．あの時、なんで、芽衣華が全てを話さなかった？」

幸仁は、なぜ？命令されていた？」

迅「まさか・・・」

美鶴「そう・・・おれがあのだ二人を使った。いい道具だった。俺は、それを・・・取り戻しに來ただけだ。」

迅「てめえ・・・また命令して動かすのか？」

美鶴「違う・・・今度は、素材として使わせてもらおう・・・もう。動き出してるんだよ？全て。」

その言葉の意味は、理解できなかったが・・・
嫌な感じがした。

クリスマスだけじゃないらしい。

そんな違和感が俺を襲う。

美鶴「さて・・・行くか？ジグリス」

ジグリス「俺は、余計な折衝に興味など・・・」

美鶴「仕方ない・・・死ね。」

ジグリス「なに？」

迅「なんでそう簡単に、仲間を落とせるんだ！！

そいつだって仲間だろ？」

美鶴「仲間？悪霊は、道具にしかすぎない・・・」

ジグリス「あああああ！！」

美鶴「だって、俺自体が悪霊だから、こう言うことも可能なんだよ！！」

俺の背中から、無理やり引き離される、感じがする。

リン「ぐっ・・・うわあ！！貴様！！何を！！」

美鶴「ははは・・・君を俺の物にする・・・」

リン「やめ・・・て・・・う。ああ！！

・・・美鶴は、私の主人・・・どうしますか？」

美鶴「今は、ほおっておけ。行くぞ」

リン「はい・・・」

そいつらは、俺の前から消える。

リンをもって。

迅「水溜！！大丈夫か！！水溜！！」

水溜「迅．．君．．大好き．．ごめん。さよ、なら。」

迅「水溜！！水溜うううXううううううXうううううううううううなんだよ。ちくしょう！！また俺は、守れねえのか！！」

うわああああああああX！！！！！！」

「守りたいか？」

迅「ああ．．当たり前だ！！」

「よかるう．．私は、天界から、貴方を見ていました。

リーンの姉、リーン ネイクティスです。

貴方に天界の者そのものになっていただきましょう。

選ばれた者のみ．．悪霊と天界の者を使う事が可能なので。」

迅「俺に．．力を貸してくれ！！あいつを倒せるだけの力を！！！！」

ネイクティス「では、行くよ？」

迅「ぬわああああああ！！！！！！あああ」

俺の体が温かくなる。

これが天界の暖からしい。

迅「てっ！！とびおりたら、死ぬじゃねえか！！」

ネイクティス「大丈夫、翼、持つてるから。安心して？」

迅「えうわあ！！」

俺は、飛んでいた。

翼が生えたように！

美鶴「楽勝だったな．．」

迅「楽勝って決めつけんじゃねえ！！」

うおおおおおおお！！」

俺は、美鶴に向かって急降下。

美鶴「何？ぐわ！」

迅「殺す．．美鶴．．殺す．．」

美鶴「面白い．．リーン。」

リーン「はい」

美鶴「表意だ。」

リン「はい．．．」

美鶴（表意）「さて．．やるか。
まずは、真正面から、突撃だ。」

迅「．．．」

俺は、ジャンプで避ける。

美鶴（表意）「なんだと？上？」

迅「行け．．刃．．ティフオウムマキネス」

刃が光りながら、

美鶴の頭の上から刺さる。

「ぐうわあ！！」

「貴方だけで楽しまないでくれる？ねえ？ティル。」

ティル「まったく．．ありえない。」

迅「お前は、？」

「私は、城川^{しろかわ} 由美^{ゆみ}なんかさ、平和に終わると思ったけど。そうは、
いかなそうね？なんか知らないけどさ。全校生徒に、緊急放送だよ
ね？」

私は、FRクラス。貴方のクラスの下ね。」

俺は、AWクラスだ。

まさかその下にもあつたなんて。

俺は、思わなかった。

だが思うのは、今度こそ。この子だけは、守る．．

そう決めていた。

美鶴「すぎあり．．なに？」

由美「後ろから？ちよつと．．ちよつと。それずるいんじゃない？

本気出すよ？

いくよつティル」

ティル「ああ、」

由美「さて．．食らえ。腕が吹っ飛ぶかもだけど．．別にいいよね
？うふっ」

美鶴「なんだ？かぜ？」

「シユン グシヤリ」

美鶴「腕が！！貴様ら！！！」

迅「おっと．．．右足もなくすかあ？」

美鶴「ちっ．．．ぬっ！！」

俺は、地面に美鶴をたたきつける。

ありつただけの怒りを込めて。

迅「さあて．．．そろそろ終わりだな？」

美鶴「くっ．．．上？」

上から、光の閃光が俺を貫く．．．

美鶴「ぐはあ！！」

俺は、これ以上追い回しても

危険とみなし。

逃げる事にした。

勝負は、後だな．．．新川 迅。

迅「てめえ！！逃げんのか！！！」

由美「深追いは危険よ。ありがとう！テイル。」

テイル「またな．．．」

迅「よろしくな．．．リンネイクティス．．．それと。ありがとう。」

由美。

由美「うん。よろしく。無理は、しないでね。」

つづく

クリスマスプレゼント（後書き）

水溜は、殺され、リーンは、美鶴に奪われる。

せつかくのクリスマスが台無しもいいところだ。

だが。敵がふえた事は事実、そして、命令していた。指令人も見つけた。

水溜を亡くした迅、だが次こそ。由美を守り抜こうと決意したのだ
った。

次回、イブの夜、（最終）

地図に存在しない町、ゴーストシティ。その町は、何が消えよう、
誰が死のうと。永遠に光を拒絶する。

ゴーストシティ。次回もお楽しみに。

イブの夜。(前書き)

俺は、新川 迅。 いよいよ。 イブの夜が来た。

今日は、ダンスパーティーらしい。

俺がすごく苦手な行事・・・

しかも、踊りたかったのは、あいつだ・・・

楽しいはずのダンスパーティーは、俺には、苦い思い出を掘り起こされるだけの。

行事になっていた。

イブの夜。

会場の席に俺は、座っていた。
最悪な思いを胸に。

でも、幸仁は、どうしたんだ？

まあいい。

あいつにいま来られても．．

「迅くうーん！！」

と、いつものりのりそのままきやがった。

俺は、無念を胸に。

「なんだよ．．」

「どうしたんだ 迅？」

「別に．．」

俺の異変にきずいたのか。

いきなり真面目な声で言われる。

「どうしたんだ？」

「ああ、」

「話してくださいよ。僕は、知りたい。」

俺は、最初に会ったばかりの幸仁の言葉使いに。

何を思ったのか。誰にも話さないと決めていたことを、

あっさり口にしてしまう。

「水溜が．．死んだ」

「どうして。そんな、」

「二人で雪見て、綺麗だなんて、言って。

告白までされて！！それなのに．．ああ．．どうすればっ！！

約束したんだ．．必ず守るって。なのに！！それなのに俺は、

また守れなかったんだ！！！！」

俺がでかい声を出して言ってしまう

だが。周りがうるさいからか

その声は、かき消される。ほかの生徒の楽しげな笑い声、楽しげな表情、司会者の声、ジューズのおかわりをする人の声に。

まるで、俺の言葉が忘れ去れて。今では、何の意味もなさない。後悔だと言わんばかりに！！

俺は、苛立っているのか？

それとも悔やんでいる？

わけのわからない感情に取り付かれていた。そんな時、

「おい。迅君」

かなり明るい声とともに前にいたのは、

「由美？どうして？ここに？」

「遠くから、あんたの姿が見えてさ。なんか寂しそうだったから、もしかして迷惑だったかな？」

「別にいいけど。」

「そっか！じゃあ、いこっ？」

笑顔を見せながら、差し出すその手は、

「貴方の悩みも、悲しみも全部聞きます」と言うような。

救いの手に見えて、

俺は、その手を取る

「最初は、こっち！」

「ああ。」

楽しそうにつれられていく迅とその由美と言う女、

「さて、俺も」

「幸仁君！」

パーティなのだが。

芽衣華の顔には、焦りがある。

「芽衣華どうした？」

「外に。黒いものたちが。」

「なんで．．．また。このパーティをつぶす気が！
行ってくる」

「だめっ！！」

「どうしてだよ！！このままじゃやばいんだろ？」

「前のとは違って、いやな予感がするんだ．．．お前は、まずいかもしれないな」

と、俺の後ろにいる。

いや、正確には、ついている。

リングレバイアスが。

後ろで言う。

「確かに危険．．．あの子に任せない？」

「レクイル貴方もそう思う？」

「だって、なんか変な感じがする」

変な感じ？ 想像力がゆたか過ぎる私は、
変な感じと言う言葉に。

あれこれ想像を膨らませていた。

良からぬ妄想も．．．「なぜ？水溜をなくした今のあいつに、そこま
でさせるんだ！！」

私は、現実にはすばやく引き戻される。

「えっ．．．亡くした？」

「そう．．．水溜は、殺されたんだ。」

「誰に？」

「それは、まだわからないが。とんでもない事が起きようとしてい
る。」

「例えば？」

「．．．戦争」

クラス中の人すべてを殺す、戦争だ。

そして、このゴーストシティを手に入れ。

現実の世界に黒いものをばら撒く可能性がある」

「そんな．．事って。」

「く．．ああ！！水溜．．水溜」

俺は、トイレの中で一人、

苦しんでいた。

そんな時、

隣の個室から、

「苦しんでいる．．暇などない。今は、前を見る。」

「誰だ？」

「まだ。お前に名前は、言えない。」

「電話！！ちょっと出るな！」

「ああ。」

「もしもし？」

「やあ．．楽しんでいないな。リーンの所有者。」

「その声は、！おい！！てめえ！！」

電話の向こうから聴こえてきたのは。

あいつだ。

水溜を殺したあいつ、

そう。白川 美鶴。

「さてと．．俺からのクリスマスプレゼントを用意した。

会場の生徒が全員、苦しみ．．息ができなくなる。

黒き手、足、首だ。

そして、それら全てを力として備えているもの。

髑髏。

「髑髏だどつ？まさか！！」

隣の奴が声を上げる。

「さあて．．この髑髏をばら撒き．．

ゴーストシティを手に入れ。

現実の世界にも、黒をばら撒く．．」

「ふざけんな！お前は、この会場が目的なんじゃないのか！」

「ああ、目的だ。そこにいる者全てを．．．希望もない。

絆もない。喜びも感情すらない。姿に変えてやるよ。

一階は、もうおしまいだな。

じゃあな．．．」

電話が切れる。

そもそもなぜ？

番号知ってたんだ？

怖いぜ．．．

最近流行の変体か？

そんな事は、今、どうでもいい。

さて．．．どうするかだ。

俺一人で行くか？

よし。

と言って、外に出ようと、

手をノブにかける。

「先に行く．．．」

隣の奴も先に行くようだ。

僕は、心配すぎて。カンパンに出ている。

そう。確かめるために。

芽衣華と確かめる。

「わあああ！！綺麗な夜景！」

「おい．．．夜景のはなしじゃないんですけど．．．」

僕の額には汗だ。

「えっ？だって、夜景見にきたんじゃないの？」

僕のせりふで。

パロったことは、

プチ以外ないが。

今だけは、パロらせてほしい。

注意・・・ファンの方は、切れます。よろしければファンの方は、ここまで、

次回にご期待ください。

では、いきますよ？

3

2

1

「えっ？夜景、見に来たんじゃないの？」

「だめだこいつ・・・早く何とかしないと・・・」

あのなあ・・・今は、夜景じゃなくて。あの船に集中してるんだよ！！」

「わあ・・・星が綺麗」

「おい・・・あのノートを用意しろ。」

「なぜだ？」

「こいつ、見てるところが違う。どう考えても邪魔だ・・・」

「ねえ、ねえ」

「はっ？」

「あれなに？」

指を刺した向こう。

何かが飛んでくる？

んっ？なんだ？

「あれなに？」

あれは・・・

「芽衣華！！伏せろ！！！」

「え？」

俺は、芽衣華の体ごと。

伏せさせる

「え？っ、うわあ！！」

「よし」

「ねえ・・・ねえ？こんないい雰囲気のところ。私を押し倒しちゃうの？」

でも。部屋のほうが。い・い・か・も。」

私は、押し倒された瞬間に
妄想モーターが暴走！

今日の夜．．私は、何をしでかすだろう。

「馬鹿かつ！！あの黒いのは、触ると

感情がなくなるんだ。それにやられた生徒を昔みた」

「そうなんだ．．」

「ちっ！！ここまでくるのか！！」

「ああ．．黒い者は、加速度が早いからな．．だが俺のスピードも

！！はあ！！」

キュインっと、音がする。

すると。

あいつが．．忍者のように早く走っている？

どういう事だ？

あいつの悪霊は、なんなんだ？

「彼自身が．．悪霊ですね。しかも、風を愛している。だから、彼

は今、風と一体

表意と同じようなものです。あの言い伝えにも続きがあります。」

「言い伝え？」

「はい。地図には、存在しない町。ゴーストシティ．．

それは、何が消えようとも永遠に光を、拒絶する。

これには、続きがあります。」

「聞かせてくれ」

「拒絶する．．しかし。友情が一つ落ち、後悔していた。者がいる

その者は、後悔のあまり。自分の影さえも奪われるだろう。

だが。天上界より救いの声がし、その天上は、新たなる力となるだろう。

そして、その者が。風と出会うとき。事が動き出す。」

これがつづきですね」

初耳であつた．．

だが一つはつきりする。

これ。毎回使うの大変じゃね？

そういうしている内に。

船の上につく。

そこには、

「来たか。」

美鶴がいる。

「あれ？お前は、誰だ？」

「風だ」

「まさか．．まあいい。来い」

まず俺は、風を纏い。そいつの腹に．．

決める。

「貴様はまさか」

「気づいたか？俺自体．．悪霊だ。風を愛する者だ」

「ちっ．．」

美鶴が両手を広げる。

すると。

手から黒い刃が飛び出し。

それを武器にする

「ならばこの刃．．貴様を刺し殺してくれよう．．表意！！」

「おいてめえ！！人のと勝手に！！」

「今は、俺のだ。」

と言うとその武器を構えながら。

振ってくる．．

「ちっ！！」

船にがながんつ！！と音を立てて。

突き刺さる。その刃は、

鋭い怨みと黒に埋め尽くされていた。

「いくぞ！！表意！！」

「はい」

「いつもの羽か？俺も羽はある！！」

美鶴の背中に黒い羽が生える。

実に気持ちが悪い。

「スピードも．．．忘れるな。」

「なに？くっ！！」

美鶴の足にスピードと風が刺さる。

「さて．．．俺も武器を出すか来い．
よし」

「なにも変わってないぞ？気でも狂ったか？死ぬぞ？」

刃が俺めがけて、振ってくる。

「．．．こっちか」

「何もしないのか。死にたいようだな」

「死ぬのはお前だ！！飛んできた刃の数を計算、終了、刺さる位置
特定。

この動きは、竜巻の用に動きながら、こちらに刺さる。

ならば．．．^{アンサー}IA風の風圧を利用。

これ．．．返すぞ？」

「なに？うわああ！！」

ざくざくと美鶴の体に刃が刺さる。

俺は、びっくりしている。

「きますよ？」

「んっ？見える？動きがこれは、？」

「天上界では、銀の目と呼んでます」

不思議なのだ。美鶴の過去、そして、
動き、全てが読める

「お前も目覚めたな！

それは、敵の動き、位置、過去をすべて見通す。銀の目まあ．．．大
切に使い。」

「みないと計算できないだろ？」

「甘いな．．」

「刃を飛ばし．．俺は、こっする」

刃が飛んでくる。分裂、

そして、

「よけきれない！！うぁー！！」

俺の肩にささる

「その傷．．深いな？」

「ふ．．」

「なに．．復元？」

「暗算モード．．刺さる位置を正確に特定．．完了。あの場所．．

BAD。この場所、DEAD。

ならば、ここはー！！」

俺は、前に出る。

「ちっ！！どんだけいるんだ！！リングも追いつかない。表意！！」

「さあて？殺しますかあ！！！！ハハハツハ！！」

「出たよ。完全、抹殺。」

俺は、ズバズバと黒いものを切り裂いていく。

血がにじむように。

両手でかく！！

血が出る。

おれの表意は、完全抹殺、

残酷なのだ。

「あとは、あっちだな」

「えっ？動きが読めない！！」

「終わりだ．．」

「うわあああー！！まあい．．もう。完了した。俺が落ちる」とで。全てが完了する設定なんだ。

悪いな？」

「計算ミス．．．広がってる？黒いものが？この速さは、まずい．．．船を動かす。」

「どこからだよー!!」

「風の風圧を制限．．．完了。重さ、クリア。被害のない位置。南

南方向に船をなげる」

「お．．．おい。マジかよ．．．」

船が軽々持ち上がり。

危害は、ない。

「黒いもの．．．広がる位置。まさか!!」

^{アンサー}1Aあの方角は、!!現実世界．．．隣町。ここ。

計算不能だ．．．数が多すぎる」

「おい!!何が起こってるんだ?」

「世界中にばら撒かれた．．．戦争が始まる。俺がとめる」

「おいおい。俺達、だろ?」

「私もいるんだけど?ひよっとして。私、存在うすいってパターンじゃないこれ?」

まあいいわ。止めるよ。皆で

「ああ」

「分かってる」

「芽衣華．．．まずい」

「えっ?」

「戦争が始まる。死ぬなよ?」

「絶対まけない」

「俺は、そろそろ動く。ほかにも動いてる奴がいる。」

俺は、連絡先の交換をした。

幸仁とか言う奴と。芽衣華とか言う奴とも。

「じゃあな．．．」

「名前は、?」

「俺の名前は、^{ひびき}1響 ^{れんじ}蓮痔

お前は、？」

「俺は、新川 迅」

「よろしく」

「私は、城川 由美

止めよう．．みんな」

「じゃあな．．」

次の瞬間、彼、響 蓮痔は、風とともに、飛んで行った。

「さあて！残りのパーティ。楽しもう？」

「ああ、そうだな」

この子だけは、絶対に守る．．

あいつの罪滅ぼしに。

そのころ。

「ここか．．ここで。始まるんだな。」

2期へ。

イブの夜。(後書き)

何とか．．．止まった。だが。
その次は、戦争．．．
そして三人が約束を交わす。
言い伝えの続きがあきらかに。
戦争を止めるため。立ち上がる。
悪霊達。物語は加速する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6358y/>

ghosta city（（ゴーストシティ））

2011年11月29日03時46分発行